

## 本質主義はもう死んでいる？

氏名：森元良太

所属：慶應義塾大学・日本学術振興会

生物学の哲学では「本質主義の死」が宣告されて久しい。生物種 (species) を自然種 (natural kind) とみなす伝統的な本質主義の考え方は、ダーウィン進化論と齟齬をきたすという理由で標準的見解の座を追われることになった。実際、多くの生物学者は生物種に本質などないと考えている。生物種についての本質主義はもう死んでいるのだろうか？

上のような状況を踏まえれば、本質主義はもう死んでいる、と答えたい。ところが近年、「本質主義の復活」が謳われるようになった。もちろん、以前の姿での復活ではなく、かたちを変えた新しい本質主義の出現である。例えば、恒常的性質クラスター説 (homeostatic property cluster theory : 以下、HPC 説と略す) や関係的本質主義などが挙げられる。いずれも伝統的な本質主義に含まれている生物学との矛盾を解消しつつ、本質主義の中核となるアイデアを生かそうとしている。こうした新しい本質主義の出現により、生物学の哲学では本質主義の議論が再熱している。そこで本ワークショップでは、この新しい本質主義を様々な角度から検討したい。

まずは網谷氏が、生物学の哲学における本質主義の議論をふまえ、なぜ生物種の古い本質主義が死に、新しい本質主義が復活したのかを明らかにする。そのうえで、HPC 説により生物種の理解がどのように変わるのか、そして HPC 説の現代生物学研究にどのような意義をもたらすのかを検討する。次に鈴木氏が、分析形而上学の観点から、新しい本質主義と分析形而上学で擁護されている様々な本質主義的主張の整合性を問うことを通して、新しい本質主義がどのような形而上学的帰結を持つのかを明らかにしようとする。最後に田中氏は、微生物学などの知見に基づいて本質主義の復活を批判的に検討する。新しい本質主義がほんとうに生物種に適用できるのか、生物学の研究指針として耐えうるものなのかについて考察する。

以上のように本ワークショップでは、分析形而上学と生物学の哲学という異なる分野の研究者が、本質主義について議論を戦わせる。その論戦を通して 21 世紀においても本質主義が生き続けられるのかを検討することが目的である。